

2021年2月21日 礼拝説教要旨

詩編講解説教49「魂を贖う値」

詩編49：6～13、マルコ10：42～45

詩編第49編は、詩編の中の分類では知恵の詩編と呼ばれるものでして、例えばヨブ記や箴言、コヘレトの言葉などと同じ分類に入ります。ユダヤ人はシナゴグ（会堂）に集まり、ラビと呼ばれる教師が子どもたちにトーラー（律法）を教えたり、このような知恵の詩編を人生の教訓として教えました。その内容の多くは日常生活に密着したものであり、身近にある問題が取り上げられました。ここでは特に富の問題が取り上げられています。「財宝を頼みとし、富の力を誇る者を」（7節）とあります。

富の問題というのは、時代を超えて人類普遍の問題と申し上げてもよいでしょう。主イエスは山上の説教の中で「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」（マタイ6：24）と言われました。神さまと富を天秤にかける。それくらい富に寄り頼み、これを神格化し、これに依存する傾向がわたしたちにはあります。富と訳される言葉は「マモン」と言いますが、ここからマモニズム（拝金主義）という言葉が出てきます。それだけ富は人間を支配する力を持っている。それは富そのものに力があるというより、この富を用いて人間を支配する悪魔的な力に気をつけなければならないということです。

富に支配されてしまう人間の失敗は、いちいちここで例を挙げる必要はないかもしれません。誰もが身に覚えのあることであり、その怖さを知っていると思います。ただここでの一番の問題は、神さまを見失い、自分が神のようになるということです。富を持つことですべて自分の思い通りになると考える。富というのは、すぐに人間を傲慢にさせ、権力を持たせます。またその一方で富を持たないことにおいても、逆に富への執着が生まれたり、人を羨んだり、妬んだり、自分を不甲斐なく思ったり、足りないことに不安を感じたりいたします。これも富に支配されている状態なのです。今日のところに「どうして恐れることがあろうか」（6節）とありますが、この恐れは富を持つものに対する恐れと理解してもよいでしょう。恐れる必要はないのに、人と比較してそのように感じてしまうのでしょうか。そのように富のあるなしが人間の生き方に大きな影響を与えてしまう。それはこの社会を見れば明らかかなことです。格差の問題があります。あらゆる不平等を生みます。富む者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなる。特に今の時代はそのような現実が顕著になっています。

ところが、唯一、人間がそういう不平等から解放される時が来ます。それは死ぬ時です。「人は永遠に生きようか。墓穴を見ずにすむであろうか。人が見ることは、知恵ある者も死に、無知な者、愚かな者と共に滅び、財宝を他人に遺さねばならないということ」（10～11節）富のあるなしに関わらず、死は誰にでも平等に訪れます。そして肝心なことは、その富のあるなしは神さまの御前には何の助けにもならない。どんなにこの世で成功したとしても、それは神さまの御前では全く通用しないのです。昨日は葬儀がありました。その時によく読まれる聖書の言葉がヨブ記の御言葉であります。「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかきこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主の御名はほむべきかな」（1：21）死は本当の意味で人を裸にします。誰も何も持っていくことはできない。まさに創世記で言われるように「塵にすぎないお前は塵に戻る」（3：19）のです。火葬して真っ白になった姿を見る時に改めてそのことを実感します。わたしたちは塵に戻るのです。人間が何と空しい存在であるか。もし信仰がなけ

れば人生はそれでおしまいです。そしてほとんどの人々はそのことを真剣に考えておりません。終活と言って、葬儀の話、財産の話はするかもしれないけれども、肝心な神さまの御前に立つ備えができていないのです。それならば人生は本当に空しいでしょう。

けれども信仰が人生の最後にそこに命を吹き込むのです。確かに死はすべてを裸にします。「塵にすぎないお前は塵に返る」それが御前に罪を犯した人間の行く末です。しかししみじくもヨブは次のように告白しました。「わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようとも、この身をもってわたしは神を仰ぎ見るであろう」(19:25~26)と。たとえ死にゆく存在でも、わたしを贖う方がおられる。その方によってわたしの人生は贖われ、わたしは神さまを仰ぎ見るのだとヨブは告白します。もちろんヨブはキリストを知りませんが、空しさを抱えた人間の切なる憧れがここにあります。その憧れは現実になりました。実際に贖う方が来られたのです。

その方こそイエス・キリストに他なりません。今日の御言葉にありましたように、「神に対して人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く、とこしえに、払い終えることはない」(8~9節) そういう絶望的なわたしたちに神さまは贖う方であるキリストを与えてくださいました。わたしたちの魂を贖う代償として御子の命を支払ってくださったのです。今日はマルコによる福音書の御言葉を読みました。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(10:45)とあります。塵にすぎないわたしたちのために尊い御子の命を身代金として差し出された。それでわたしたちは罪の支配、富の支配から救われたのです。

「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された」(ヨハネ3:16)の御言葉を思い起こします。神さまはわたしたちの存在を空しいものとさせないために大切な独り子を与えてくださいました。それほどまでにわたしたちを愛してくださり、価値あるものとしてくださったのです。もし皆さんが自分の命を捧げても、全財産を献げて惜しくないと思うものがあればそれはその人にとって本当の宝でしょう。神さまはわたしたちをそのように思ってくださいます。これ以上の恵みがあるでしょうか。この救いの恵みを知っている者は、もはや富に執着することはありません。全てを得ているからです。先週から受難節(レント)が始まりました。キリストの苦しみ、それはわたしたちの魂を贖うための苦しみです。罪の支配から、この世のものに寄り頼む空しさから、わたしたちを贖い出すためにキリストは十字架の苦しみを耐え忍んでくださった。そのことを心に留めて、感謝をもって日々過ごしてまいりましょう。